

食の安全安心と資源循環を目指す経営管理技術を評価 - 経営管理領域の拡大に注目 -

審査委員長 横溝 功

今年度は 20 道県の地方審査委員会より、酪農 9 事例、肉用牛繁殖 6 事例、肉用牛肥育 2 事例、肉用牛一貫経営 2 事例、養豚 7 事例の計 26 事例の推薦があった。魅力ある優秀な経営が多く、審査委員会では例年以上に審査に苦慮し、一部経営について評価が分かれ、投票によって決定したことを報告する。

これら推薦事例について、第 1 回審査委員会で書類審査を行い、最優秀賞、優秀賞候補として 12 事例を選考した。そして、今年は 12 事例全部について、書類内容で把握できなかった項目、審査上で必要な項目について現地確認を行った。第 2 回及び第 3 回の審査委員会を経て、先ほどの発表内容がこれまでの審査内容と相違ないことを確認し、最終的に最優秀賞 4 事例、優秀賞 8 事例を決定した。

審査基準は例年と大きく異なることはないが、今年は経営者における食の安全安心と資源循環に対する取り組みに重点をおいた。なお、今年も昨年同様に畜種別の垣根を取り除き、生産性、収益性等の経営実績、それを支える経営管理技術、特色ある取り組みや活動等を、評価の中心に据えて、審査を行ったことを強調する。

それではまず、最優秀賞 4 点を発表する。

まず、**酪農経営**で北海道中川郡中川町の「**家族で楽しむ酪農生活 - 持続可能なシンプル経営 -**」というテーマで発表された小林治雄さん、富士子さん。

つぎに、**肉用牛繁殖経営**で宮崎県宮崎郡清武町の「**33 年をかけ多頭経営を築き上げたモデル的肉用牛繁殖経営 - 極めて堅実な経営方針こそ着実な増頭につながる -**」というテーマで発表された増田純一さん、哉枝(ちかえ)さん。

第 3 に、**肉用牛一貫経営**で島根県益田市種村町の「**国内食品残渣を活かした大型畜産経営の確立**」というテーマで発表された農事組合法人松永牧場。

第 4 に、**養豚経営**で徳島県名西郡石井町の「**生産効率よりも品質にこだわった養豚一貫経営**」というテーマで発表された有限会社石井養豚センターである。

また、このほか 8 事例は優秀賞と決定した。

最優秀賞・農林水産大臣賞

北海道中川郡中川町 小林治雄、富士子さん(酪農経営)

小林さんは、1ターンで北海道の酪農家として定着している。全国誌で、中川町での就農の広告を知り、平成元年9月から翌年3月に中川町の先進酪農経営で研修し、冬期の作業を経験する。平成2年4月から8月にかけて、承継農場で夏期の作業を経験し、同年8月31日に農場を承継している。労働力は、小林さん夫妻の二人で、経産牛37頭を飼養し、平成18年度には約800万円の経常所得を上げている。

以下、経営の評価すべき特徴点をあげる。

第1に、初期のころの乳量追求による乳牛の事故という苦い経験を経て、役場や普及センターの技術者の指導を受けながら、集約放牧に取り組んでいる。道内での集約放牧の研修会に熱心に参加するなど、合理的な放牧方式を確立している。また、屋敷周りの農地を安定的に借入して、現在、放牧可能な23haの農地を集積している。

第2に、放牧を活かすために、放牧に適した自家産の乳牛の育成に努めている。後継牛のポイントとしては、乳成分、肢、体型に重点をおき、健康な乳牛を飼養している。また、畜舎内での繋留には、チェーン繋ぎ方式を導入し、乳牛のストレス解消につなげている。

第3に、町内初の搾乳時のペーパータオルの導入、搾乳警報機導入による過搾乳の防止、牛舎から牛道までのコンクリート舗装など、安全安心な生乳生産に取り組み、体細胞の数値は6~7万という厳しい自己基準を設定している。

第4に、乳牛の事故による経営不振に直面して、パソコンによる簿記ソフトを導入し、長年にわたって入力が続けている。また、自ら年々の長期借入金の償還額や、ファイナンシャルリースのリース料の一覧表を作成し、資金管理にも余念がない。その結果、農協の組合勘定残高を常に黒字の状態で維持している。

第5に、平成9年に畜産協会による経営診断を受診し、技術データを把握していないことを悟り、畜舎のホワイトボードやメモ帳に記帳を心がけている。現在では、これらのアナログ・データと、携帯電話によるデジタル・データも併せて、意思決定に役立つ総勘定元帳のようなノートを作成している。携帯電話は、そのアドレス帳の機能を活用し、牛群のデータ管理を行っている。

第6に、前述のデータの入力・記帳・整理を、搾乳前に必ず行い、その結果を基に、経営の意思決定を夫婦二人で必ず行っている。二人が同じ情報を共有することによって、的確な日々の作業遂行につながっている。

第7に、一連の農作業を、夫婦二人が楽しんで行っており、そのことが経営の好結果につながるとともに、後継者の就農希望にもつながっている。今後

は、後継者の就農を機に、さらなるバージョンアップが期待される。

最優秀賞・農林水産大臣賞

宮崎県宮崎郡清武町 増田純一、哉枝(ちかえ)さん(肉用牛繁殖経営)

増田さんは、自己資本の充実によって繁殖雌牛の増頭を徐々に進めてきている。借入による繁殖雌牛の増頭は一切行っていない。この経営行動に、経営主の強い意志が働いている。労働力は、増田さん夫妻の二人で、繁殖雌牛 65 頭を飼養し、平成 18 年度には約 1,400 万円の経常所得を上げている。

以下、経営の評価すべき特徴点をあげる。

第1に、平成 13 年に酪肉基本方針啓発普及事業(モデル経営育成対策事業)で、繁殖牛舎・たい肥舎のモデル牛舎を整備した際に、子牛の下痢が発生したが、友人から迅速に情報を収集し、乳酸菌等を子牛だけでなく繁殖雌牛の飼料に添加するなど、問題を克服している。また、冬場には、温水を給与している。

第2に、6 ha の農地を集積し、夏作はスーダンやソルゴー、冬作はイタリアンライグラスとエン麦の混播を生産している。団地化した農地に、平成 16 年からロール体系を導入している。また、たい肥との交換で地元産の稲わら 6 ha 分を集草している。その結果、TDN1kg 当たり生産費が約 48 円と低コストになっている。

第3に、北海道日高の競走馬の牧場から、馬の飼料には適合しないが、牛には良質の一番草を、友人と共同で購入したり、飼料会社から、自らの目で見て良質の乾草を選んで購入している。コストは要するが、健康で元気な子牛を育成している。

第4に、繁殖雌牛は、分娩期、授乳期、それ以降期に牛群を分けて管理し、朝昼晩の3回観察し、個体管理を行っている。その結果が、過去5年間の平均分娩間隔 12 カ月以下という極めて良好な繁殖成績につながっている。

第5に、購入飼料の在庫管理は徹底し、販売子牛1頭当たり生産原価を家族労働費を除けば約 26 万円に抑えている。他方、増田さんの子牛は市場で人気があり、雄・雌ともに1頭当たり 60 万円近い単価になっている。その結果、繁殖牛常時1頭当たり経常利益は約 15 万円と高い値になっている。

第6に、増田さんを中心にカウカウ塾という研修会を開催し、肉用牛農家間の情報交流や新技術の情報入手に役立てている。

第7に、平成 19 年4月に就農した後継者は、10 月から1年間、県の家畜改良事業団で研修しているが、経営に戻った時点で、繁殖雌牛を 100 頭まで増頭の予定であり、さらなる経営展開が期待される。

最優秀賞・農林水産大臣賞

島根県益田市種村町 農事組合法人松永牧場(肉用牛一貫経営)

松永牧場は、新しい事業領域にチャレンジし、中間投入の自給割合を高め、低コストで安全・安心な畜産物の生産を目指している。家畜疾病の治療という視点から予防という視点に切り替えたところに、経営の斬新性がある。構成員3戸5名、従業員27名で、肥育牛約7,000頭、繁殖牛約700頭を飼養して、平成18年度には約1億1,000万円の当期純利益を計上している。

以下、経営の評価すべき特徴点をあげる。

第1に、平成15年にISO14001を取得して松永牧場の環境方針を打ち出し、平成16年に生産情報公表牛肉JASを取得して生産方針を打ち出している。各環境単位の管理責任者に権限と責任を与えることで、各々の部署で考えた経営行動をとるようになっていく。なお、出荷前180日は抗生物質を使用しない等の厳しい自主基準を設定している。ISO・JASに対応したソフトを1,100万円のコストで開発し、農場独自で行う牛の血液検査データなどを基に個体管理を行っている。

第2に、獣医師4名に大動物診療所の設立を働きかけ、月50万円の診療費を支払い、個体管理のデータを基に、飼料設計を専務の直行さんと相談して決めるなど、数量的・科学的管理を行っている。また、事故の多いほ育過程において、獣医師は、家畜疾病の予防に取り組んでいる。

第3に、飼料給与では、冬期に、近隣の健康食品工場の残さとライスセンターのもみ殻を、夏期には、河川敷の雑草を、通年では、粕類や野菜くずを活用している。河川敷の雑草のケースでは、雑草の分別に合弁で別会社を作り、代表理事の和平さんが当該会社の社長を務めている。その結果、繁殖牛1日1頭当たり飼料費は200円と、「先進事例の実績指標(2006年)」(繁殖雌牛20頭以上)の276円(= (90,811 + 9,969) ÷ 365)よりもコストを下げている。肥育牛1頭当たり飼料費は月平均8,600円で、「先進事例の実績指標(2006年)」(肉用種去勢若齢80頭以上)の11,145円(= (133,430 + 313) ÷ 12)よりもコストを下げている。

第4に、肥育もと牛は、和牛の場合、農場の繁殖部門、合弁会社で酪農経営の株式会社メイプル牧場(平成17年10月設立)からのET産子、外部導入で調達している。今後は、自家産()やグループ()からのウェイトが高まることになる。交雑種の場合、酪農家との契約で子牛市場から初生牛で購入している。酪農家の中で2戸の大規模酪農経営からは、初生牛の飼養履歴情報をFAXで送ってもらいJAS対象牛になっている。なお、自家産やグループからのもとも牛は、飼養履歴が記録されておりJAS対象牛である。繁殖部門では、超早期親子分離を実施し、ほ乳ロボットを導入している。

第5に、たい肥化処理では、狭い面積でもたい肥化可能な機械装置の製造

会社を合併で立ち上げ、専務の直行さんが当該会社の社長を務めている。農場のたい肥は、主要な販売先であった緑化資材用の需要が落ち込んだが、ホームセンターでの販売に切り替え、安定した販路を確保するとともに、20 ha のたい肥と稲わらの交換、14 ha の飼料イネの作付けなど、耕畜連携も図っている。

第6に、昭和 59 年以來、安定的に黒字を続け、繰越剰余金を内部留保している。その結果、多大の固定資産投資を行っているにも関わらず、自己資本比率が 45%となっている。今後は、食品残さを活用した飼料工場を建設中であり、資源循環型の畜産経営の誕生が期待できる。

最優秀賞・農林水産大臣賞

徳島県名西郡石井町 有限会社石井養豚センター(養豚経営)

石井養豚センターは、獣医師である農場長の創意工夫で、高い技術成績を収め、安全・安心の生産体系を構築している。また、川下への事業展開を図っている。構成員は7名で、うち農場部門へは2名が専従している。農場の従業員は、正社員3名、研修生2名、臨時雇い3名で、繁殖雌豚約 380 頭を飼養し、肥育豚約 8,600 頭を出荷している。役員報酬は7名で 5,600 万円であるが、法人に貸与している農地の賃借料 3,500 万円を含めると、構成員の所得は約 9,000 万円になる。

以下、経営の評価すべき特徴点をあげる。

第1に、中ヨーク種を取り入れた4元交配を行い、一般よりも1カ月長い肥育期間で肉質を熟成させている。ハード面では、オランダの空調システムの整備で豚の飼養環境を整え、ソフト面では、ハエの駆除に天敵のオフィラ、ネズミ対策にステンレス製のまきびしを用いたり、群飼の管理でしっぽ噛み防止のおもちゃを考案している。そして、ハエの駆除やネズミ対策の薬剤を使用していない。

第2に、以上のハード面とソフト面での相乗効果によって、分娩回数は2.36回で、「先進事例の実績指標(2006年実績)」(繁殖豚 50 頭以上規模層)の2.2 回を上回っている。同様に、離乳子豚頭数は 23.2 頭(20.9 頭)、肉豚出荷頭数は 22.3 頭(18.4 頭)と優れている。

第3に、肥育豚は、と場でと畜された後、2日以内に大阪の生協と石井養豚センターが出資している(株)ウィンナークラブで加工される。大半は生協で販売されているが、直売部門である「リーベ・フラウ」でも販売している。このように、川下に事業展開を図っている。

第4に、飼料は、生協からの要請で NON-GMO と PHF の飼料を用いている。しかし、2社から指定配合を導入するなど、飼料の調達コストの低減に努めている。

第5に、農場は標高 450m の山頂にあり、臭気等の苦情が全くない環境にあるが、豚舎の床はステンレスのスノコで、家畜排せつ物は、豚舎からたい肥舎へトンネルを通過して移動する仕組みになっている。家畜排せつ物は、固液分離され、尿は曝気槽で曝気された後、野菜水耕栽培に利用している。たい肥は9カ月かけて完熟され、生協との連携で 90% 以上が販売されている。

第6に、施設内に教育・研修のための施設「とんじゃ」を設置し、積極的に交流を図っている。今後は、(株)ウィンナークラブの稼働能力の余力を考慮して、さらなる増頭を計画している。まさしく、マーケットインの経営戦略といえる。

**優秀賞・農林水産省生産局長賞
茨城県久慈郡大子町 戸辺久夫、まちよさん(酪農経営)**

戸部さんの経営は、中山間地に立地して頭数規模拡大が難しい中、平成2年に、大子町受精卵移植研究会の設立の発起人になり、平成3年より ET 和子牛生産を開始している。平成18年には経産牛飼養頭数41頭に対して、22頭の ET 和子牛を販売し、地元家畜市場への和子牛上場による貢献にもなっている。飼料生産にも熱心で、3 ha を借地し、4 ha の作付けを行い、簡易バンカーサイロによるとうもろこしサイレージに取り組んでいる。たい肥は、副資材にもみ殻、稲わらを用い、米ぬかを添加するなど良質たい肥生産に心がけている。その結果、たい肥の90%以上を耕種農家に販売している。県立大子一高農業科の卒業生グループ「若葉会」の耕種農家との連携も図れており、平成16年には長男が就農し、経営全体としての潜在能力の高さを有している。

**優秀賞・農林水産省生産局長賞
長野県南佐久郡南牧村 新海益二郎、尚子さん(酪農経営)**

新海さんの経営は、高原野菜産地に立地して、経産牛59頭を飼養している。とうもろこしの収穫調製に、平成15年秋から4戸共同でチューブバックサイレージ・システムを導入している。高額の特用機を中古で安価に調達するなど、コストの低減だけでなく、労働強度の軽減も図っている。牧草は、3戸共同で約80 ha を収穫調製している。平成7年から、牛群検定・牛群審査を開始するなど、牛群改良に努めている。また、繋ぎ飼い牛舎は、トンネル換気を施し、ニューヨークタイストール・厚手のゴムマットを採用するなど、カウコンフォートを追求している。その結果、経産牛1頭当たり産乳量は1万 kg を超えている。家畜排せつ物は、近隣の野菜農家へ譲渡して耕畜連携を図っており、極めて堅実な経営を展開している。

**優秀賞・農林水産省生産局長賞
兵庫県神戸市北区山田町 弓削牧場(酪農経営)**

弓削牧場は、昭和18年設立の(有)箕谷酪農場と、昭和63年設立の(有)レチェール・ユゲからなるグループの総称である。昭和45年に神戸市の山林を開墾し、現在では、酪農・加工・外食・ブライダル・イベントの拠点を構築している。昭和59年に、農場独自に、カマンベールチーズ創作に挑戦し、昭和60年には、乳製品製造許可を取得している。昭和62年には、飲食店業許可を取得して、チーズハウスを建設し、消費者交流の先駆けとなっている。昭和63年には、乳処理業許可を取得して、前述のレチェール・ユゲを設立し、低

温殺菌ノンホモ牛乳の製造販売を開始している。農場では、平成 18 年に搾乳ロボットを導入し、経産牛 33 頭を飼養しているが、ロボット搾乳に適合する牛群改良に乗り出している。経営主夫妻、子供 3 名が就農し、正職員 7 名、パート 36 名を雇用し、平成 18 年度の総売上高は 1 億 8,000 万円に上る。川下への事業展開の先進事例として、多くの教訓を提供している。

優秀賞・農林水産省生産局長賞 大分県玖珠郡玖珠町 有限会社グリーンストック八幡(肉用牛繁殖経営)

グリーンストック八幡は、その前身である任意組合のコントラクター組織を、平成 10 年に構成員 3 名で法人化したものである。その際、経営の安定化を考慮して肉用牛繁殖部門も取り入れ、構成員 3 名が飼養する繁殖雌牛を買い取るという形態をとっている。現在、繁殖雌牛 90 頭を飼養し、平成 18 年には肥育牛舎も建設し、肥育牛 21 頭を飼養している。代表者が繁殖雌牛の管理台帳を整理し、発情周期を確認しており、そのことが放牧して群管理しているにも関わらず、分娩間隔 12.2 カ月と良好な成績につながっている。代表者の長男も平成 20 年に社員として参入し、肥育牛の常時飼養頭数を 50 頭まで拡大する予定である。集落有財産である二つの共同牧野において事務局として管理し、放牧と 45 ha の牧草収穫作業を行っている。また、別の共同牧野の管理も町の畜産公社から委託されている。主要なコントラクターの役割としては、繁殖農家 14 戸・38 ha のイタリアンライグラス、スーダンの収穫・調製作業、63 戸・18 ha の水稻の収穫作業を受託している。これらは、高齢化する当該地域における農家の経営支援になっている。稲わらの集草では、町を越えて行い、49 ha も集めている。現在は、商社を通じて稲わらの販売を行っているが、肥育牛の増頭に伴い、自己の経営でも用いる予定である。子牛に給与する輸入乾草を除けば、粗飼料はほぼ 100% 自給である。構成員が各々役割分担を果たし、分業の利益を享受している。地域農業だけでなく地域社会にとって、ますます重要な組織になっている。

優秀賞・農林水産省生産局長賞 沖縄県国頭郡伊江村 山城畜産組合(肉用牛繁殖経営)

山城畜産組合の労働力は、現在、家族の 4 名と叔父の合計 5 名である。平成 10 年にさとうきびなどの作目をやめ、複合経営から肉用牛専業経営になっている。平成 11 年に任意組合の山城畜産組合を設立し、平成 12 年に沖縄農業基盤確立農業構造改善事業により、100 頭規模の牛舎と草地管理機械一式を取得している。その後、ハード面では、経営管理のためのパソコン、超早期親子分離に合わせたほ乳ロボットを導入している。ソフト面では、繁殖ステージ毎に管理ボード等による個体管理、ほ乳量等のプログラムについての

吟味、農協の飼料センターから供給される TMR の利用も合わせて実施している。これによって、現在、繁殖雌牛 126 頭になっているが、分娩間隔 12.2 カ月と良好な成績を収めている。山城畜産組合が立地する島内の農地は限られているが、16.5 ha の飼料生産を実施している。また、公共の採草地もうまく活用している。たい肥は、90%を耕種農家に販売している。今後は、限られた農地の下で、自給飼料の制約から、現状の繁殖雌牛頭数を維持しながら、70 頭規模の1産取り肥育部門の導入を図るなど、さらなる高付加価値化が期待できる。

**優秀賞・農林水産省生産局長賞
群馬県高崎市上滝町 有限会社 江原養豚(養豚経営)**

江原養豚は、平成 18 年に生産情報公表豚肉 JAS を取得している。経営主夫妻とパート2名の労働力を基本として、繁殖雌豚 155 頭を飼養している。平成 12 年から飼料会社からの打診を契機に、無投薬の豚肉生産に取り組む。当初は、事故率が増えるも、試行錯誤の結果、通常の養豚成績まで向上させる。繁殖雌豚は、個体管理カードに繁殖成績など 25 の項目を記録している。肉豚も離乳後、体重別・性別に1豚房 20 頭で群管理を行うが、生産管理シートと移動カードの2種類で、生産履歴情報が管理されている。治療が必要な肉豚は無投薬の肉豚とは分離して飼養されている。また、平成 18 年からは NON-GMO の飼料を用いている。現在は、地元中堅食肉会社との連携により「ハーブ豚」としての銘柄化を図っている。平成 15 年からは、夫人手作りのホームページで宅配を開始し、「えばらハーブ豚 未来」の銘柄で販売している。夫妻の2人3脚で、安全安心の豚肉を産直できる体制まで構築した先進事例と位置づけることができる。

**優秀賞・農林水産省生産局長賞
新潟県南蒲原郡田上町 吉澤博文さん(養豚経営)**

吉澤さんの経営は、繁殖雌豚を県内のオーエスキー・PRRS 清浄地域のブリーダーから導入している。平成 16 年には、新潟県畜産協会からクリーンポーク生産農場に認定される。現在、100 頭の繁殖雌豚を飼養している。家畜の飼養では、分娩頭数の多い繁殖雌豚の子豚を、少なかった繁殖雌豚に里子に出しているが、里子には強そうな子豚を出すなどの創意工夫を施している。その結果、繁殖雌豚1頭当たり肉豚出荷頭数は 25.4 頭と極めて優良な成績を享受している。また、木炭を混合した指定配合飼料を使用したり、ブロック肉を真空パックで約2週間氷温熟成させる技術を開発し、「熟成豚」の銘柄で販売している。官能検査・試食検査を実施し、食品スーパー・旅館・ホテルへも販路を広げている。たい肥は、粒状たい肥を稲作農家へ、粉状たい肥を

野菜作農家へ販売している。さらには、秋田県大潟村の JAS 認定無農薬有機米栽培グループにも販売している。また、後継者の就農により、今後も持続的な高水準の経営展開が期待できる。

**優秀賞・農林水産省生産局長賞
石川県七尾市能登島別所町 村田重則、里枝さん(養豚経営)**

村田さんの経営は、平成 13 年に長男が就農し、労働力が村田さん夫妻と長男の3名で、繁殖雌豚 140 頭である。2年後に繁殖雌豚 200 頭までの増頭を目指している。なお、養豚以外にも、水稻 90a、畑作 289aの複合経営である。踏み込み式の子豚育成舎を全て自家労働で建築したり、繁殖豚舎・肥育豚舎・車庫についても基礎工事以外は自家労働で建築している。平成 21 年春に、新たに繁殖豚舎が完成予定であるが、自家労働で対応している。これは、分娩豚舎を広くし、育成率の向上を目指している。家畜飼養では、育成用・肥育用の飼料に生菌剤を添加している。繁殖雌豚1頭当たり約 2 万 4,000 円の低い負債残高であり、今後も安定した経営展開が期待できる。